

主 題：七つの教会への使信2、スミルナ教会、「忠実な教会」

聖書箇所：黙示録 2章8-11節

どうぞ黙示録2:8をごらんください。七つの教会への使信の二番目、スミルナの教会に対する神様のメッセージを見て行きます。

A. 主の使信 8節

1. 宛先：「スミルナ」

8節「また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。」、この七つの手紙を順番に見て行くと同じ書き出しです。この神様からのメッセージが一体だれからのものだれに宛てたものなのか——。8節にはまずその手紙の宛先がスミルナであることが記されています。

このスミルナという町は、前回見たエペソの町から北に大体60キロ上がったところにあります。小アジア、現在のトルコの大都市のひとつです。ここにはすばらしい港があり、商業の町として栄え、現在はイズミールと呼ばれています。イスタンブールに次いでトルコ第二番目の港湾都市であると言われていています。ここに行くと、いつでも新鮮な魚介類を食べることができ、今も栄えた町です。この町は紀元前1000年ごろにギリシャの植民地としてできました。そして滅ぼされた後、紀元前290年にマケドニア王国の将軍リシュマコスによって再建されます。この時すばらしい都市計画に基づいて再建されたので、市街地は大きく長方形に区切られていて、幅の広い道路が真っ直ぐにしかも広範囲にわたって伸びている美しい町です。

このスミルナはローマの皇帝礼拝を最初に行なったところでもありました。ですからこのスミルナの町には偶像をまつたたくさんの神殿が存在していました。またここには競技場があったり、壮大な公共図書館があったり、小アジア、トルコ最大の劇場などがあったと言われていています。

2. 送り主：

この町の教会に対するメッセージを送ったのは主ご自身です。送り主がここに紹介されています。主ご自身をご自分について「初めであり、終わりである方」、もう一つは「死んで、また生きた方」と説明していることに気づきます。主は目的を持ってこのようにご自分を表しておられます。

1) 永遠の神：「初めであり、終わりである方」

最初に「初めであり、終わりである方」というのは、ご自身が永遠に存在なさる方であるということをご再び明らかにしておられます。私は永遠から永遠に存在する神であり、その神がどんな時にもあなた方から離れることなく、あなた方とともにいるのだと教えます。だから、スミルナの兄弟姉妹たちよ、恐れることはない。

2) 人となられた神：「死んで、また生きた方」

二つ目に、「死んで、また生きた方」と記されています。これは、我々罪人に救いをもたらすために永遠の神が人となられたということを表しています。この「死んで」という動詞と「生きた」という動詞、どちらも同じ時制を使っています。それは、主はここで、主イエス・キリストが十字架で死なれたことと主イエス・キリストがその死後三日後によみがえって来られたという二つの出来事が実際にあった出来事で、真実であるということをご明らかにしたかったからです。

ではなぜイエス様はこんなことを言われたのか——。このスミルナの教会の人々は大変な迫害を経験していて、死と隣り合わせでした。そういう人々に、私は死を経験し、その恐怖も全部わかっていると。死に直面していた彼らにとっては大きな慰めになったでしょう。また主は復活をされたのだということをご明らかにしました。つまり私は人間がどうすることもできないこの死にもう既に打ち勝った存在である。なぜなら私は神であり、あなたたちにこの勝利を与えたのだと。1コリント15:57でパウロが言った「神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」ということばを思い出します。主イエス・キリストがあの死から敢然と肉体を持ってよみがえり、主は死に対して完全に勝利されたということ。そしてその勝利がイエス・キリストを信じるあなたにももう既に与えられているということです。我々は死んでも生きるのです。我々は死とともに永遠を生きるのです。

B. 主の評価 9節「知っている」

さて、そのことを語った主はこの教会に対する評価を9節で与えています。9節「『わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。』、この「知っている」という動詞に注目してください。完全に知っていると言うのです。しかも9節のみことばを原語で見ると、「知っている」ということばを強調するため

にこのことばが最初に出て来ます。そしてイエス様は9節で、私はスミルナの教会の三つのことをよく知っている、完全に知っていると言われます。その三つのことを今から見て行きましょう。

1. 「あなたの苦しみ」 圧迫、患難、苦難

まず最初に9節「わたしは、あなたの苦しみと」と「苦しみ」ということばが出て来ます。これは「圧迫」とか「患難」、「苦難」という意味を持ったことばです。1:9でも「苦難」と訳されている、同じことばです。またパークレーは「物理的な重力を受けて砕かれること」、何か上からすごい圧力がかかって砕かれてしまうような意味を持ったことばだと説明します。つまりスミルナの人々は本当につぶされるような大変大きな重圧、圧迫を受けて苦しんでいたということがまず最初に記されています。彼らは信仰ゆえの重圧を経験していました。まさにいのちの危険とも隣り合わせのような状態の中を彼らは歩んでいたのです。

2. 「あなたの貧しさ」 貧困、極貧

二つ目に「貧しさ」ということばが出て来ています。これは新約聖書の中に3回しか出て来ないことばです。こことⅡコリント8:2、9に出て来ます。このことばは貧困とか極貧という大変貧しい状態を指します。Ⅱコリント8:2では「極度の貧しさ」と訳しています。パークレーはこの「貧しさ」ということばについて、こんな説明を加えているのでご紹介したいと思います。ギリシャ語では貧困を表わすのに2種類のことばがある。一つはペニアということばです。ペニアは蓄えのない人たちで自分で働いて必要な物を得る人たちの意味です。全く貯金がないから毎日の生活のために一生懸命労しておられる人たちを表わすことばです。もう一つはプトケイアということばです。これは極度の貧困、無一文の状態を指します。ここで使われているのはプトケイアということばで、スミルナの教会の人々は大変な貧しさの中にいたということがわかります。

ではなぜ彼らはそんな極貧生活を送っていたのかです。考えられる理由として挙げられているのは、イエス・キリストの信仰に反対する人々によって、財産が略奪されていた可能性があります。レオン・モーリス先生は「クリスチャンへの略奪はなぜ起こったのか——。その理由はキリスト教は法律上許可されていなかったからだ」と言います。法律でクリスチャンの集まりが認められていない以上、だれかが何かを行ったら、これは不法の集まりだということでクリスチャンたちの物を略奪していた可能性があるのです。もしかすると、そういう理由で彼らは大変な貧しさを経験していたということが考えられます。

* 興味深いメッセージ：しかしあなたは実際は富んでいる

しかし我々が注目したいのは、彼らがどれだけ貧しかったかではなく、極貧の中にあっても彼らは実は富んでいたと聖書が言っていることです。9節「しかしあなたは実際は富んでいる。」と主は言われます。非常に興味深いメッセージです。主が言われていることは、本当の豊かさは物質によってもたらされるものではないからです。もし本当の豊かさが物質によつてのみもたらされるとしたら、彼らには物が無いのですから一番満足からかけ離れた存在です。しかし主も言われているし、私たちが彼らに話を聞くことができるとしたら、当然彼らは自分たちは満ち足りていると証言したでしょう。本当の満足は神が与えてくださるものです。どんなに貧しい状況にあつたとしても、我々は物質的に豊かな人々よりも満足を持って生きることができる存在です。パウロが言うように「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあつても満ち足りることを学びました。」（ピリピ4:11）、心から本当の満足をもって生きることができる祝福を神様は私たちクリスチャンに約束してくださったのです。

では我々はどうすればその祝福を持って生きることができるのかです。救われていながらその満足を持って生きていない人もいます。何が違うのかです。その答えは、彼らが豊かだったのは、彼らは主に對して忠実だったからです。主に對して忠実だったから、主は彼らを祝して彼らの必要を満たし、彼らの心がいつも満ち足りた状態にあるように保つてくださった。豊かさというのは、本当の満足というのは主から与えられるものだからです。ですから私たちが主に對して正しく歩み続けることがこの満足を持って、豊かさを持って生きる条件だということです。我々がいつも考えなければいけないのは、私の歩みが神の前に正しいかどうかです。心配しなければいけないのはそこだけです。あなたが神の前を正しく歩んでおられたら、神はあなたを喜び、神はあなたを祝し、神はあなたを用いてくださる。まさにこのスミルナの人たちはそんなふう生きていたのです。神を喜ばせていたのです。ですから彼らはどんなに極貧状態にあつても、神様の満足をもって生き続けることができたのです。

3. 「あなたがたへの罵倒」 悪口、そしり

イエス様はこのスミルナの教会の人々が経験していた大変な貧しさ、また彼らが経験していた大変な非難です。9節の後半に「ののしられている」と出て来ます。これはあなたがたへの罵倒と言いますか、悪口やそしりです。彼らのことを「ののし」つたのは「ユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの

会衆である人たち」です。なぜこんな書き方がされているのかというと、ユダヤ人たちは自分たちは神の民、神様から選ばれた特別な民なのだと自負していました。しかし悲しい現実には、彼らは神を喜ばせることではなくて、かえってサタンを喜ばせることを行なっていたのです。彼らがしていたことは、主のみこころに従って生きることではなくて、サタンの計画に添って生きていたのです。だからイエス様がこの地上におられて、働きをされている時にユダヤ人たちはイエスに対して「あなたは悪霊につかれている」と言いました。マルコ3:22で「ベルゼブルに取りつかれている」と言いました。またイエス様のなされたみわざはサタンの力によって行なっているのだと言って彼らはイエスを非難しました。マタイ12章やルカ11章にも出て来ます。彼らは確かにみことばは学んでいたのです。確かに神様はイスラエルの民を選ばれた。でも、その選んでくださった神を、約束されていた救世主を彼らは信じることはなかった。かえってこの救世主に逆らって彼を十字架に追いやって行ったのです。

だからイエス様は何度も彼らのことを非難されました。ヨハネ8:44で「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。」と、主は彼らを非難された。確かに神によって選ばれていながら、あなたたちはその神を信じることもなければ、その神に従うこともない。かえってその神を迫害し、ユダヤ人たちは主だけではなくクリスチャンたちをも迫害しました。例えばアンテオケという町において、使徒13:50に「ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。」と記されています。彼らはまことの神を拒むだけではなく、神を愛する者たちに迫害を加え、彼らを苦しめていた。彼らはサタンの目的のために用いられていたのです。だからイエス様は彼らはユダヤ人だと自称しているけれども、そうではなく、かえって「サタンの会衆である人」たち、サタンの会堂に属する人たち、サタンの手先となっている者たちだと。悲しい現実です。我々もどんなにみことばを学んでも我々の心がどうかということに気をつけなければいけません。私たちがいつも吟味しなければいけないのは、我々の心です。主が何度も我々に教えてくださるように、神は我々の心をごらんになっておられる。ここを見て私たちがはっきりと確信を持って言えることは、この人たちが一体だれに仕えているのかを主はご存じだということです。このユダヤ人たちが神ではなくてサタンに仕えているから「サタンの会衆」だと厳しく言われたのです。

さてこうして主は、スミルナの人たちが経験しているすべてのことを私は知っているとお話になって、クリスチャンたちを励ますわけです。神はあなたのすべてのことを知っていて、あなたの心を知っていてくださっていると。心強いですね。あなたがどんなに誤解されたとしても神はあなたを知っている、心配しなくていいと。そのように神はこのスミルナの人々を励ますわけです。

C. 主の奨励 10-11a節

1. 「苦しみの約束」

10-11節の初めを見ると、主の奨励というのが出て来ます。まず最初にイエス様は、苦しみの約束を記されています。

1) 主イエスは、クリスチャンには必ず迫害が伴うことを警告した。

10節「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。」と。「苦しみ」というのは苦痛を経験するのですが、これは現在形です。継続してあなたたちは苦痛を経験し続けて行くと。イエス様はクリスチャンには必ず迫害が伴うと言われました。ヨハネ15:20でイエス様ご自身が「もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」と言われました。ですからクリスチャンには迫害が約束されています。

2) 主イエスは、彼らに迫り来る苦難を告げた。

また、その迫害が彼らに迫り来るということも告げておられます。10節「見よ。悪魔はあなたがたのためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。」と。

(1) 「どのような迫害が迫り来るのか？」

さてどんな「苦しみ」がやって来るのかというと、「牢に投げ入れ」られると書いてあります。クリスチャンたちが「牢に投げ入れ」られる、そういう困難を経験すると約束されています。「牢に投げ入れ」られると言うと、なにか鉄格子に閉じ込められることを想像します。でもその当時の牢は告発された者が死刑か流刑のどちらかの判決が下るのを待つところだと言われます。ですから何となく鉄格子の中に入ってしばらくしたら解放されるというのではなくて、牢に入れられるというのは自分のこれからの運命がもう決まったようなものです。死刑にされるか、島流しにされるかのどちらかです。その判決を待っているのが牢に入れられるという状態です。つまり彼らは大変な「苦しみ」、殉教の危険と隣合わせであったということです。

(2) 「どのくらい迫害が続くのか」

しかもこの「苦しみ」は「十日の間」続くと。では、この「十日」というのは何かというと、いろいろな説がありますが、一つはローマの10人の皇帝によって迫害を受けるという説があります。もう一つはディオクレティアヌスによる10年間の迫害があるという説。三つ目はこの10というのには聖書においては象徴的に長い期間を指すから非常に長い期間苦しみがあるという意味ではないかとする説。四つ目は実はこれは非常に短い限られた期間の話ではないかという説。いろいろな説が存在するのですが、私たちは、この「十日の間」というのは字義、つまりことばどおり取り取ります。確かに聖書の中で日数が記されているところに字義どおり取るところがあります。これが例えば10年なのか、ローマの10人の皇帝というふうになかなか見ることができない。ですから、あなたたちには「十日の間」大変な苦しみが来るのだと、恐らくそのように主が彼らにお伝えになったのでしょう。

◎ 注目：迫害は必ず起こる。しかし、すばらしい約束がある！ 10節

そこまで話して皆さんにどうしても見ていただきたいことがあります。あなたたちには苦しみが来ます。大変な苦しみに遭ってひょっとしたら殉教するかもしれない。十日の間そうやって苦しみを受ける。こういうメッセージを今聞いた皆さんはどんな反応をしますか？どこかに逃げようとか。少なくとも我々はこのメッセージを聞いていてそこに希望を見出すかということ、そこに希望は見えない。このメッセージだけ聞いていると、何となく大変な恐ろしさを抱くわけです。でも実はここにすごいメッセージがあるのです。

10節に「見よ。悪魔はあなたがたをためすために」と書いてあります。悪魔が私たちクリスチャンをためすって悪魔は何をしようとしているのかと疑問に思いませんか？もちろんこのスミルナの人たちを試すって一体どういう意味なのだろうと。もちろんサタンはクリスチャンたちを迫害します。あのペテロも迫害しました。ルカ22:31に「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを妻のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。」と、迫害があるという話です。またパウロ自身もサタンの迫害を受けていました。彼は肉体に一つのとげが与えられたと言いました。彼は「それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。」とⅡコリント12:7で言っています。また旧約聖書においてヨブはサタンの苦しみを経験しました。愛する家族を失ってしまったり、持ち物を全部失ってしまったりと。確かにサタンはクリスチャンたちを苦しめます。

日本語の聖書には「悪魔はあなたがたをためすために」と書かれています。なぜサタンが私たちクリスチャンをためす必要があるのかと、大変誤解を招いてしまう箇所です。実はこの訳では「あなたがたをためすために」の主語は「悪魔」に見えますが、この主語は「悪魔」ではなく、神です。非常に大切なところですよ。ぜひ皆さん覚えてください。「あなたがたをためす」のは、神だと言っているのです。10節の初め「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。」の「している」という動詞と「あなたがたのうちの有人たちを牢に投げ入れようとしている。」の「している」、10節の中にメロウという同じギリシャ語が2回出て来ます。この動詞の意味は、真理によって、神様の意思によって～することになっているとか予定されているということです。ですから「あなたが受けようとしている苦しみ」というのは、実は神があなたたちに与えようとしているものだ。「あなたがたのうちの有人たちを牢に投げ入れようとしている。」の「している」も神様の意思に基づくものだ。ですからこの箇所が言わんとしているメッセージは、サタンがあなたをためすのではなく、神がそのわざをなしておられるということです。

サタンがクリスチャンを苦しめる目的は、あなたが信仰から離れるように、あなたの信仰を弱らせるためです。サタンがヨブに対して誘惑をなした時に、神の前で彼は「彼の持っている物を取り除いたら彼はきっとあなたを呪うに違いありません」と言います。サタンはクリスチャンを苦しめたら、きっと彼らはみんな神を呪い、神に背を向けて、神様から離れて行ってしまふ。だから苦しめたらいいと思うのです。だからサタンはこうして許可を求めようとするのです。でも完全な知恵を持っておられる神は、サタンのその計画を使って、あなたの信仰を成長させるというご自身のみわざをなされるのです。この10節のみことばは、そのことを私たちに教えてくれるのです。

ペテロもⅠペテロ1:6-7に「:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、:7 あなたがたの信仰の試練は、火で精練されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのときに称赞と光栄と栄誉になることがわかります。」とあります。またヤコブはヤコブ1:2-4で「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。:3 信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。:4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」と言っています。

まとめるとこうなります。あなたの生活にいろいろな困難や苦しみが起こって来ます。でも、あなたが覚えなければいけないのは、そのことをよしとされているのは神であって、神はそれを使ってあなたに信仰の成長の機会を下さっているのです。神様のなさることに無駄なことはないのです。神はみんな

ご自身の栄光のため、そしてあなたや私が主にあって成長するために。なぜ成長するか——。成長することによって神の栄光が現わされるからです。いろいろ悲しいことや辛いことが確かにいっぱい起こります。でもそういった中であって、私たち信仰者が取るべき態度は、そのすべてのことを支配し、私はこのことを通してあなたの信仰を成長させると言われる神を見上げて信頼を置いて生きるのです。この10節のみことばが私たちに教えてくれているのは、いろいろな迫害があるけれども、実はそのすべてのことはあなたの信仰が成長するように、神があなたのために与えられたものだということです。なぜなら私たちの信仰はいろいろな苦しみを通して成長し、いろいろな困難を通して神に信頼することを学ぶのです。頭ではわかっているはずだったけれども、実際にそういう局面に遭遇して我々は主に信頼を置いて生きることがどんなにすばらしいのかを学んでいるわけです。信仰というのは我々の頭だけ、知識だけの話ではありません。日々の生活を通して神を身近に感じ、神様の偉大さを感じ、神の恵みを感じ、その中に生かされていることを喜びながら従って行くわけです。このみことばが私たちに教えてくれることは、何もわかっていない、完全な知恵を持っていないサタンが一生懸命我々を苦しめようとするけれども、神はそれを用いて私たちの益のために、そしてご自身の栄光のためにその機会を使ってくれるということです。すごい神様だと思いませんか？サタンが何をしてもかなわない。そのことをこの箇所は我々に教えてくれるのです。だから忠実であり続けなさいと言うのです。主の励ましは、確かにあなたに苦しみがある、でもその苦しみはちゃんと神の完全な計画のもとに与えられるものだ。

2. 「忠実さへの奨励」

二つ目の奨励は忠実さを守り続けて行きなさい。忠実であり続けて行きなさいということです。

1) 「恐れてはならない」 ヨハネ 16:33

10節でもう一度見ていただきたいのは、「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。」とあります。大変な状況にあって、恐れてしまって、神を見ないで神から目を背けてしまうようなことがあってはならないと。私たちの問題はずっと神を見続けることがなかなかできないことです。我々はすぐに周りに起こっている現象を見てしまいます。そうであってはいけません。恐れてはいけません。これは現在の命令です。継続して恐れを除きなさいと。

2) 「死に至るまで忠実でありなさい」

そして「死に至るまで忠実でありなさい。」という命令です。あなたの生活にどんなことが訪れようと、たとえそれによって死が訪れることがあったとしても、主に対してあなたは忠実でありなさいと。これを聞いて大変だと思われるかもしれない。でもそのために我々は生きているのです。私たちが思い出さなければいけないのは、イエス様を信じる前はすべて自分のために生きて来て、そこには本当の満足はなく、祝福もなく、永遠のいのちもありませんでした。そこにあったのは神の呪いと永遠のさばきだけです。でも我々が生まれ変わるによって、新しい生き方が始まったのです。それは本来の生き方であり、神様に従って行くという神が望んでおられる生き方です。何度か学んで来た「救い」ということを思い出してください。救いというのは別の言い方をすれば主に従うことです。あなたも私も決心をしたのです。まことの神であり、すべての主権者である救い主であるこの方に私は従って行きます。この方が主人で私は奴隷です。その決心をもって我々は救いに与ったわけです。イエス様はいろいろなことが起こるけれども、私について来なさいと言われるのです。そのような生き方をする者として生まれ変わった我々はそのように歩み続けて行くことです。忠実であり続けて行きなさいと。そういう忠実な生き方こそが神がお喜びになる生き方です。そしてこれこそ永遠に価値のある生き方です。そうでない生き方は永遠に価値のない生き方です。自分の好きなように、少しだけ自分の思いどおりに生きても、神の前に立った時に全く価値がないなら空しいです。神があなたや私に命じておられることは私に従って来なさい、私が教えることに従って来なさいということです。ここでスミルナの教会に対して主は死に至るまで忠実であれ、いろいろなことが起こるけれども、恐れず、私を信じて、信頼して後をついて来なさいと。

3) 「使信への傾聴」 11a節

11節の初めのところに「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」とあります。これは2:7にも出ていました。神のメッセージに耳を傾けなさいというすべての教会に対する勧めです。それは教会の、そしてひとりひとりの、あなたの責任だと言うわけです。

D. 主の約束

1. 「いのちの冠」

最後に10節と11節の後半に主の約束が記されています。10節の最後「そうすれば」と続いています。「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」と。この「いのちの冠」というのは、主からいただく祝福の報いです。「いのちの冠」の「の」という助詞は～によってできているとか、～があるという意味です。ですから、「いのちの冠」というのは、「いのち」によってできている

る「冠」です。王冠みたいな頭に飾るものと思ってしまうがちですが、ここで言われているのは「いのち」によってできている「冠」、つまりいのちをいただく約束されているのです。そして10節の「そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」の「いのち」という名詞は、前に冠詞がつけられていて限定されています。ここで言いたい「いのち」は永遠の「いのち」だということが明らかにされているのです。

さて、「いのちの冠」というのが永遠の「いのち」だということはわかりました。そうすると、少し疑問が出て来ます。もう一度10節の後半を見ると、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」、言い方をかえたら「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば私は永遠のいのちを与えよう。」。そうすると、永遠の「いのち」をいただくための条件が書いてあるように思えます。「死に至るまで忠実であるなら永遠の「いのち」を得ることができると。これも非常に注意しなければいけない箇所です。「そうすれば」という接続詞には「そうすれば」という以外の意味があります。英語だと“and”とか“also”、“but”、つまり「そして」とか「および」や「そしてまた」と訳せる接続詞がここで使われているのです。もちろん「そうすれば」という意味もありますが、それだけではない。訳者はその中であえて「そうすれば」という日本語を選んだのです。だから私たちが注意しなければいけないのは、ここで、「あなたが死に至るまで忠実であったら、永遠のいのちを得ることができる」とは言われていないということです。そうは教えていないということです。あなたがとても頑張って生きたら、最終的に永遠のいのちを神様が下さる、そんなことを聖書は教えていません。この聖書の箇所が教えているのは、「忠実であり続けることができる人が実は救われている人なのだ」ということです。

イエス様はマタイ10:22で「最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」と言われました。マタイ24:13でも「最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」とあります。これも「最後までいろいろな困難に耐え忍んだら結果的に救われる」と教えているかに思えます。でも違うのです。「最後まで耐え忍ぶことができるのはその人に永遠のいのちが与えられているからだ」と言っているのです。皆さんもイエス様を信じてその救いに与っているけれども、いろいろ辛いことがあって、時に神様を見失ってしまうことがあったとしても、あなたの心の中に神様がおられて、神はあなたの心の中に働いてくださって、「私を見るように、私を信頼して生きていくように」と働いてくださるのです。だから失敗しながらでも神様に喜んで従って行きたいと思って歩むのは、あなたが生まれ変わったからであり、あなたが神様の救いに与っているからです。ですから、行ないをすることによって救いを結果的にもらうのではなくて、救われているから救われた者にふさわしい生き方をする、そのことを教えているに過ぎないのです。

ヨハネはIヨハネ2:19で「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです」、我々の仲間の中からだれかが出て行った。そのことに関してヨハネは、彼らは確かに我々とともにいたけれども、もともと我々の仲間ではなかったと教えています。仲間とは救われている人たちです。自分たちとともにいたけれども、彼らはもともと救われていなかったから、その信仰から離れて行ってしまった。ですから神様は、救いに与ったあなたに永遠のいのちを与えてくださる。そして救いに与ったあなたは死に至るまで主に従って行こうと思い、そのように歩んでおられる。そのことがここで示されるわけです。

2. 「第二の死への完全勝利」

最後に、神様の祝福の二つ目に「第二の死」への完全勝利が約束されています。11節の後半「勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」とあります。この「第二の死」とは、永遠の地獄のことです。主イエス・キリストの救いを拒んだ人たちが火と硫黄の燃える池の中で眠ることなく苦しき、痛みを感じながら永遠を過ごすところ、それがこの「第二の死」です。黙示録20:14-15に「:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」とあります。また黙示録21:8にも「おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。』」と。「第二の死」というのは永遠の地獄のことであるとみことばは明確に教えています。11節の終わり「決して第二の死によってそこなわれることはない」、ここに否定語が二つついています。地獄に行くことは絶対にあり得ないということを強調するのです。それが約束です。あなたには永遠のいのちが与えられる。そしてあなたは絶対に、絶対に永遠の地獄に行くことはない。なぜなら救われたから。

◎ ヨハネの最後の弟子ポリカーブの殉教

さて、スミルナの教会に宛てたこの手紙、この教会は非難されていません。主がお喜びになっていたすばらしい教会でした。この教会にはひとりのリーダーがいました。彼はこのスミルナ教会の監督でした。実際に彼は使徒ヨハネの最後の弟子であったと言われています。名前はポリカーブです。彼は紀元155年2月23日の土曜日に殉教したと歴史が言います。一体どんなことが起こったのか――。最後にご紹介して終わります。

その日は協議が行なわれるというので町では人があふれていた。興奮している群衆の中で突然だれかが叫んだ。「あの無神論者を葬ってしまえ、ポリカーブを探し出せ!」、ポリカーブは難を逃れることができた。しかし彼はある夢を見ていた。それは頭を横たえている自分の枕が燃えている夢だった。目が覚めた時、彼は弟子たちに私は生きてまま火あぶりにされなければならないと語った。彼の居場所は拷問に遭って口を割った奴隷によって漏れてしまっていた。捕える者たちが来た時、ポリカーブは彼らに食べ物とまた彼らが求める物は何でも与えるようにと弟子たちに命じた。そして自分自身に関しては最後に1時間祈る機会を与えてくれるように彼らに願った。逮捕に来た者たちの責任者でさえ、ポリカーブが死ぬことを望まず、町の協議場へ向かう短い道中、年老いたポリカーブに「シーザーは主である」と告白し、ぎせいを捧げて死を免れることのどこに問題があるのでしょうかと主を否定して死を免れるようにと懇願するのであった。しかし、ポリカーブは彼にとってイエス・キリストのみが主であることを断固主張した。彼が協議場に入ると天からの声があった。「ポリカーブよ、強くあれ。男らしくあれ。」と。ローマ総督はキリストの名を呪ってシーザーにぎせいを捧げるか、それとも主を選ぶかの選択を迫った。ポリカーブは「86年間私はキリストにお仕えして来ました。キリストは私に対して不誠実なことは一度もありませんでした。私を救ってくださった王を冒瀆することがどうして私にできましょうか。」と言った。総督が「火あぶりの刑に処す」と脅かした時、ポリカーブは答えた。「あなたはひとときだけ燃える火でもって私を脅かそうとされますが、その火はすぐに消えてしまうものです。あなたは来るべき永遠のさばきの時に、悪い者を待ち受けている火をご存じないのですか?」、「なぜためらっておられるのですか? さあ好きなように私を処分なさってください。」。やがて群衆は仕事場や風呂場から大量の薪を持って来た。ユダヤ人はそのような重い荷物を運ぶことによって安息日に関する律法を犯すことになるにもかかわらず群衆に先駆けて薪を持って集まって来た。人々がポリカーブをはりつけのための柱に縛りつけようとした時、彼は言った。「このままにしておいてください。火に耐える力を与えてくださる方は私の体が釘で打ちつけられなくても炎の中で不動の姿勢を保ち続けることができるようにしてくださるでしょう。」。そこで人々は彼の体を緩く縛ったまま火を放った。そして祈りを捧げて天に凱旋したと。

この教会にはこういう信仰者がいたのです。道理でこの教会がこんなに祝されていたのかがわかります。もちろん彼だけではない。この教会のひとりひとりがこの主を愛して、主に忠実に歩んでいた。スミルナということばには「没薬」という意味があります。これはミルラの木から採取した香気のある樹脂で香料や薬用に用いられたものです。このスミルナのクリスチャンたち、この教会はまさにこの香りを放つ「没薬」のようなものだったのです。彼らは大変な苦しみを経験しました。しかし、その中でキリストの香りを放ち続けていた。だから主が喜ばれたのです。そんな信仰者になりたいと思いませんか? この後どんなふうにああなたの人生を歩んで行かれますか? これまでと同じように歩んで行かれるのか、それとも主が言われたように私はあなたに忠実に生きて行きたいと、残された人生をこれまで以上に、あなたに喜んでいただくためにあなたのみことばに従い、あなたの栄光のためだけに生きて行きたい。そんなふうに行きたいです。そんなふうにしてこの人生を終わりたいです。そんなふうにして主にお会いしたいです。なぜなら、そうやって生きて人たちがいるのです。彼らの歩みをみならってそんなふうに行きたいと思えます。あなたはいかがでしょうか? いろいろなことが起こるけれども、心配しなくていいと神は言われた。すべてあなたの信仰が成長するためだと。しっかり主を見なさいと。どんな主がああなたの神なのか——。どんな主によってあなたが守られているのか——。導かれているのか、しっかり覚えていなさいと。ひよっとしたら、それが今のあなたに必要なかもしれません。主に目を向けることです。そして主に忠実に従い続けて行くことです。なぜならそれが神が望んでおられる、神様を喜ばせる歩みだからです。そのように歩んで主の栄光を現わし続けて行きましょう。

《考えましょう》

1. 主がご自分のことを「初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方」として紹介されたのはどうしてだと思われませんか?
2. 10節の「あなたがたをためすために」の主語は誰でしょう。この節が教えていることをあなたのことばで記してください。
3. 「いのちの冠」とは何でしょう? 「死に至るまで忠実であること」がこの冠をいただく条件なのではないでしょうか? この聖句が教えていることを記してください。
4. 「第二の死」とは何でしょう?